広　場

イスラエルの社会保険と医療供給

社会保障研究所　平石　長久

1. イスラエルとの出会い

今年の１月中旬，中型封筒の航空便が外国から届いた。その宛名には，私の名前の下に，社会保障研究所の英文名，Tokyo Japan, そして郵便番号だけが示されていた。イスラエルから届いた郵便物だったが，これだけの宛名でよく届いたものである。もっとも，よく見ると、宛名の右下の余白に，太い鉛筆字で「3－3　社会保障研」と大きく書いてあった。郵便局の職員が郵便番号を手がかりにして，社会保障研究所をつきとめて，住所を調べ，番地と研究所名を書き添えてくれたのであろう。社会保障研究所の英文名は、全く別な表現になっているのに，よくつきとめてくれたものである。郵便局の方々に大変な御苦労と迷惑をかけたことだろう。郵便物を無事に届けたいというかれらの努力と親切に深く感謝する。

それはともかく，親切な郵便局の職員の尽力により，無事に手許に届いた郵便物を，私はしげしげと眺めた。それは昨秋タシケントで催されたＩＳＳＡ地域会議で逢ったイスラエル代表の１人，ローター氏（Mr, Roter）が送ってくれたイスラエルの社会保険の資料だった。その後，ニザン氏（Dr,Nizan）からも同一の資料が届いた。これらの２人はいずれも社会保険庁の人びとで，ローター氏はニザン氏の後任である。ニザン氏は私がイスラエルで逢って以来の知人で、ローター氏がタシケントでニザン氏の最近の消息を伝えてくれた。

私とイスラエルとの出会いは２０年以上も前のことになる。もっとも，４０数年前に，外地で暮していた子供の頃，父の友人のユダヤ人が家に居候でしばらく暮していたことがあった。そんなに古い話は別として，２０年以上前に，在日イスラエル大使館気付で，資料が沢山届いた。その当時，大使館には，赤池さんという日本人の女性職員がおられて，私が勤めていた早稲田大学の付属研究所にそれらの資料を転送して頂き，大変お世話になった。その資料はイスラエル労働組合総同盟の傘下に入るクパト・ホリム（Histadrut Kupat Holim）という団体から届いたもので，その団体がこの国の任意制健康保険を管理・運営している。その団体の責任者であったカネヴ氏（Mr, Itzhak Kanev）が，その後も長年にわたり資料を送って下さった。また，私がイスラエルを訪ねたとき，この人が身許引受人になり、滞在中のすべてを手配してくれた。

私がイスラエルを訪ねたのは，1968年5月の中頃で，独立記念日の直後だったから，テル・アヴィヴ（Tel Aviv）の並木通りには，飾りの小さな国旗が一杯残っていた。

夜はまだ多少肌寒いスイスからギリシャを経て着いたイスラエルは，すでに夏といってもよい気候だった。ギリシャでは，照りつける太陽に暑いと思ったが，イスラエルはギリシャよりも暑かった。

利用したＳＲ（スイス航空）のジェット機は，すっかり暗くなったテル・アヴィヴの空港に着陸した。この空港はその当時ロッド空港と呼ばれていたが，後年，日本赤軍などの惨劇が発生して以後，名前をベングリオン空港と変えられている。

搭乗機を降りて，それほど遠くない空港ビルまで歩き，入国手続きをして，トランクを待っていると，私よりちょっと背が高い位の初老の紳士が近づき，声をかけてくれた。これがカネヴ氏で，かれに直接に逢ったのはこの空港の対面だった。かれはまるで古くからよく顔を知っているかのように，そして，あたかも，長旅を終えてやっと帰ってきた息子を迎えるように，温く出迎えてく

れた。

当時のロッド空港はかなり呑気で，出迎えや見送りの人びとは奥の方まで自由に出入りできた。また，出入国の手続きもきわめて簡単で，税関検査は形だけのものにすぎなかった。しかし，テロの銃撃事件以後，それらはきわめてきびしくなり，とくに，日本人にはきびしくなったと聞いている。

空港ビルの外に出て，カネヴ氏の友人が運転する車で市内に向った。車は広い道路を高速で走り，道路では，時折車に出会うだけで人の姿も見かけなかった。空港の近くでは，あたりが暗く，ヘッドライトに浮ぶもの以外にほとんど何も見えないので，周囲の状況はさっぱり判らなかった。市内にやや近付くと，建築途中の建物などが見えたが，説明では，それらは勤労者の住宅に予定されていた。

市内に入ると，道路の両側に街路樹が並んでいた。幾つかの通りを抜けて，車はある小さな通りにあるこじんまりした建物の前に停った。それはカネヴ氏らが用意してくれたホテルで，私はイスラエルの第1夜をそこですごした。

2. 社会保険制度

イスラエルから届いた資料は，前述したニザン氏がまとめられたもので，社会保険が示されていた。この資料を用いて，1979年の状況を概述しよう。

この国の社会保険は1948年の建国以前に端を発しており，それは私的な任意方式の制度を源流にしている。つまり，２０世紀の初期にユダヤ人の移住者がこの土地に住み，開拓を始めた頃のことである。この国に滞在中に，ガリリー湖のほとりに古いキブツ（集団農場）を訪ねたが，これが最初のキブツで，ここの農業労働者組合がマラリアなどの悪疫に対して疾病金庫を設けた。これがこの国の社会保険の源流になっている。その後，建国までに，労働災害補償など幾つかの制度が設けられ，建国後に，それらの制度は引きつがれた。建国後には，既存の制度を改善したり，各種の制度を加えて，今日の制度が作り上げられている。

社会保険は各種の保険制度を含んでおり，それらは老齢・遺族，廃疾，労働災害，出産，児童，および失業で、さらに，倒産時の被用者の保護と支払準備金の制度も加えられている。通常，多くの国々では，老齢・遺族と廃疾は同一の保険制度に組み入れられており，時折，廃疾に別な勘定を設ける例がみうけられる。この国では，老齢・遺族と廃疾は別な保険制度になっている。また，疾病保険もしくは健康保険は，疾病と出産の両部門を同一の保険に含めているが，この国では，出産だけを対象とする保険を設け，疾病や傷害の部門は労働組合総同盟の私的な制度に託している。

この国では，所定の条件で受給資格を取得できる家庭の主婦を除き，18才から年金年齢までの全居住者が国民保険（上述した各保険制度を含む）の強制的な適用をうけ，市民権をもたない外国人の居住者も同一の取扱いをうける。1977－78年間に約140万人の被保険者が記録されているが，これは家庭の主婦や老齢年金の受給者を除いている。1975年のちょっと古い年の人口は約342万人で，その約36％に当る約124万人が経済活動人口であったが，上述した被保険者は経済活動人口とみられるグループをほぼすべてカバーしているといってもよい。

(1) 老齢年金

老齢・遺族保険による給付のうち，老齢年金は原則として，男子70歳，女子65歳から受給を認められる。男子の年金齢は各国の中で最も高い年齢で，かって，幾つかの国がこの年齢を用いていたが，現在では，この国が唯一の例になっている。もっとも，この国の制度では，労働からの収入がある所定の水準（扶養家族数により高くなる）以下の場合，男子65歳，女子60歳から老齢年金の受給が認められる。上述した水準は賃金水準の変化に応じて毎年修正され，また，生計費の変化に応じて，ある期間で定期的に変えられる。

年金を受給する資格取得条件は比較的に寛大であるが，加入期間として，144カ月（12年），もしくは加入していなかった期間が合計60カ月未満の期間が一応要求されている。

老齢年金の基本年金は単身者で全国的な平均賃金の16％で，配偶者に８％，

2人までの子供に1人当り5%ずつが加算される。上述した老齢年金の基本年金は,10年以上の拠出に対して,10年を超える1年当り支給率が2%ずつ増額される仕組みになっている。このような増額分を加えた支給率の最高は50%に制限されている。つまり,この年金制度は,10年以上の拠出について有利な年金を約束しているが,しかし,一応上記が用意されており,増額を評価されるのは17年分で,50%の支給率を利用できるのは,拠出を27年以上支払った者である。この上限を利用できる受給者は,平均賃金の50%に相当する基本年金を受給し,配偶者がいる場合には,年金は平均賃金の58%になる。

なお,男子で65歳以上70歳まで,女子で60歳以上65歳まで,年金の受給を延期すれば,基本年金は受給延期の1年当り5%ずつ増額される。この方法は年金を受給しないで,より長い期間就労させるのを期待している。

また,基本年金を超過する他の所得を取得していない場合,年金受給者は補足的な給付を受給することができる。かなり多くの年金受給者がこの補足的な給付を受給しており,1978年11月には,年金受給者の45%がこの給付を受給していた。この補足的な給付は一般会計から財源を調達され,国民保険公社が給付を支給している。

老齢年金受給者のうち,かなりの受給者,とくに,補足的な給付を受給する所得の低いグループは,医師の診療と薬剤の給付を健康保険から受給することができる。しかし,この医療給付は入院の病院医療を含んでいないので,部分的な給付になる。このように,提供される医療給付が不十分な点を補完するために,労働・社会省と労働組合総同盟の疾病金庫(クパト・ホリム)は,医療給付の利用に関する協約を結び,この協約によって,補足的な給付を受給する低所得グループは,病院医療を含むすべての給付を利用できることになっている。労働・社会省はクパト・ホリム以外の疾病金庫とも同様な協約を結び,それらの疾病金庫も上述したように,低所得の年金受給者にすべての給付を提供している。

遺族給付と廃疾給付は省略する。

(2) 出産給付

出産保険の給付は一時金と定期的な支払いの出産給付に分れている。

出産一時金は,国籍を問わず,被保険者もしくは被保険者の妻の全員に,病院の出産を条件として支払われる。このように,病院の出産を条件としているのは,自宅分娩を控えて,病院の近代的な設備の利用を奨励することを企図している。本来,この給付は,病院の出産に馴染みの薄い外国からの移住者を主に対象としており,これらの人びとに病院を利用させることが重要な目的であった。したがって,この給付は出産に病院を利用させるために,病院の出産を無料にすることも併せて配慮されている。このように,この一時金は病院の出産と組合わされており,一時金は病院への直接的な支払いと,産婦への一時金で構成されている。1979年には,後者の一時金は1,700ポンド(イスラエル・ポンド,以下同),双生児で8,500ポンド,3人で17,000ポンドであった。なお,病院から9マイル(約14,4km)以上離れている場合,交通費も支給される。

定期的な支払いのいわゆる出産給付は,被用者として働らいているか,集団農場で働らいている18歳以上の女子被保険者の出産休暇中に支払われる。給付の支給率は直前3カ月間の平均賃金(上限がある)の75%である。給付の支給期間は,加入期間が直前の14カ月間に10カ月以上,もしくは22カ月間に15カ月以上の場合に,12週間で,18カ月間に10カ月以上の場合に6週間である。外国からの移住者の場合には,直前の14カ月間までに6カ月以上被用者として,もしくは,自営業者として働らいていた者に,給付が6週間支払われる。また,10歳未満の子供を養子にし,子供の世話で就労の中断を余儀なくされる者にもこの給付は支給対象を拡大している。なお,配偶者が出産で,もしくは,出産後1年以内に死亡した夫は,子供の世話で就労を中断せざるを得ない場合,この給付を受給できることになっており,支給率は女子被保険者と同一である。

(3) 財源調達

上述した社会保険の重要な財源は保険料で,1979年の拠出率は老齢・遺族保

険で被用者が2.0%，使用者が3.6%（合計5.6%），自営業者と無業者が5,6%である。出産保険では，被用者が0.7%，使用者が0.7%（合計1.4%），自営業者が1.4%，無業者が0.7%である。これら以外にも各種の社会保険が実施されており，上述した拠出を含むそれらの各社会保険の拠出合計では，被用者が3.8%，使用者が11.65%（合計15.45%），自営業者が15.6%，無業者が13.8%である。

(4) 健康保険

健康保険は任意方式の私的な制度として実施され，重要な4種類の制度が実施されている。これらの制度でカバーされる被保険者は約354万人で，約77%が労働組合総同盟の健康保険に加入し，この制度は最も規模が大きく，総人口の約74%をカバーしている。

労働組合総同盟のクバト・ホリムはこの組織が所有する医療機関，もしくは，他の施設を利用して，治療的と予防的な医療，およびリハビリテーションを提供している。提供される医療は，通常各国の公的な健康保険制度が提供する医療給付とほぼ同一で，広範な内容をもっている。

労働組合総同盟はこの健康保険以外に，私的な年金保険，社会福祉活動なども実施しているが，それらは省略する。

3. 労働組合の医療供給

労働組合総同盟は前述したクバト・ホリムの健康保険により医療給付を提供している。任意制の私的なこの健康保険は，前述したように，総人口の74%をカバーしており，幅広く活躍している。そのような活動を支えるために，クバト・ホリムは病院，診療所，その他の医療機関を所有し，かつ，経営している。病院では，この国の約半数はクバト・ホリムが所有しているといわれる。診療所は1978年に1,203で，妊産婦と子供のセンターが218である。また，同年に医療を担当するフルタイムとパート・タイムの職員は27,662人で，これには4,906人の医師と8,948人の看護婦が含まれている。

私が訪ねたときに，これらの医療機関やそれらの活動を見せてくれたが，医療機関の組織は病院を頂点として，その下に診療所を結びつける傘の形になっていた。案内されたある病院は，松林の中に平家の病棟がタコの足のように広がっており，病床数は500床だった。また，訪ねる機会を与えられたある病室は，数人を収容する部屋で，病室から松林に散歩に出かけられるようになっていた。病院長の説明では，どの病室も他の病棟の病室が見えない角度で作られていた。この病院には，医師，看護婦，およびその他各職種の職員を合せて，約500人近い人びとが働らいていた。綺麗な病院で，機能も整備されていたが，最大の難点は病棟が平家で，遠い病室では食事が冷えるということだった。その欠点を補なうためと，病床を増やすために，訪問したときには，敷地内に鉄筋ビルの病院（500病床）を新しく建設していた。

診療所は都市地区の各診療科目を備えたポリクリニクス，集団農場の診療所など各種の規模と内容をもつ診療所で構成されていた。案内された都市地区のポリクリニクスは，スラム・クリアランスをした一画にあり，新しい2階建の建物で，内部は明るく，清潔だった。1階には，比較的に広い事務室があり，この地区に居住する全員の記録が保管されていた。この診療所の医師は住民のホーム・ドクターの役割を果していることになる。農村地区の診療所は常時診療活動を行うものと，最低限の診療活動を必要に応じて実施するものに分けられ，後者は前者より末端の組織といえる。常時診療活動を行う診療所は，あるキブツ（集団農場）の居住区にあるものに案内されたが，そこでは，数人の患者が診療を待っていた。ここは簡単な診療を実施し，高度な診療を要する患者は病院に送られていた。末端の組織に当る診療所は，訪問したとき，患者がいないので，医師は近くの自宅に帰っており，3人の看護婦が留守番をしていた。この診療所もきわめて簡単な診療だけ扱っており，軽症の患者か，病院を退院した療後サービスの患者だけを取扱っていた。あちこちをのぞいてみたら，薬剤室には，ほとんど薬剤が置いてなかった。お茶を御馳走になりながら話していると，電話連絡があり，それは畑で病人が出たので，救急車で迎えに行くと

いう連絡だった。その後，話を続けていると，間もなく病院の救急車が来たがすでに病人を畑で拾い，このまま病院に帰ると告げ，救急車は立去った。話では，その病院の救急車はその付近の住民をほぼ15分以内でカバーできるということであった。

ある工場に案内されたが，これは労働組合総同盟の工場で，大きな建築資材や小さなスプーンやフォークまでを生産するかなり大規模な工場であった。この工場では，工場長などの経営担当者は工場内では労使の交渉で使用者の立場になるが，本来，かれらも労働組合員で，労働組合総同盟の会議には，組合員として出席する奇妙な立場であった。厄介なその立場を説明し，工場長は笑っていた。工場内を見学した後で，診療所を見せて貰ったら，医者はいなくて，看護婦が診察台の上に寝転んで，本を読んでいた。この診療所には，看護婦が1人いるだけで，医師は全く置いていなかった。大きな工場であるにもかかわらず，この程度の設備や人員でよいのかと尋ねたら，必要な場合には，すべて救急車で病院に運ぶということであった。

クパト・ホリムは医療機関を経営するだけでなく，薬剤，医療の器具や資材など色いろな分野も取扱っていた。テル・アヴィヴにそのセンターがあり，必要な物がここから全国にトラックなどで輸送されていた。ここでは，安くて，しかも良い物ならば，どこの国からでも買うということで，あちこちの国から購入された物が広い倉庫に整理されていた。歯科医療に使用するユニット（椅子）は，日本から届いたばかりだといって，箱から取出したユニットの一部が，床に転がしてあった。薬剤の中には，半製品や原料で輸入し，このセンターで完全な薬剤にする方法も用いられており，センターに小規模な工場が設けられていた。係りが指で示した半製品の薬剤は，西ドイツから輸入されたものだった。

これらの例に示されるように，クパト・ホリムは広範な活動を展開しているが，労働組合総同盟は市民の保健・衛生に多額の資金を投じていた。訪問した当時，この組織が保健・衛生に支出する資金は，政府の同様な支出を上まわるといわれていた。それらの活動には，外国から新しく到着した移住者に対するある所定期間の健康管理，診療などの活動も含まれており，元来，政府が担当するそれらの活動を肩代りしていた。これは労働組合総同盟が影の政府と呼ばれる一端を示していた。

4. 聖地巡礼の老婦人

イスラエルの労働組合総同盟は，ガリリー湖畔のキブツ（集団農場）をルーツにする団体で，いわゆる労働者だけの組織ではなく，集団農場の構成員も加入しており，協同組合に似た性格をもっている。このような労働組合総同盟は，働らく人びとの組織であるばかりでなく，多種多様な企業も経営しており，ホテルもその1つに含まれ，この国の観光案内にも示されている。私が到着後の第1夜をすごした2階建の小さなホテルも，その系列のホテルであった。

労働総同盟の経営するホテルは色いろなランクがあり，アルファベット順にAから次第にランクが下っていた。私が第1夜をすごしたホテルは，比較的にランクが下だったようである。カネヴ氏達は私の乏しい財布を配慮してくれたのであろう。しかし，かれらはそのホテルを知らなかったし，下見もしていなかったようである。かれらは私を案内したそのホテルの中に入り，「これはひどい。明日は別なホテルに移って貰う」といい出した。ともかく，かれらは「明朝迎えに来るから，待っているように」といい，引揚げていった。

1人になって部屋に落着くと，成程面白い部屋だった。やや細長い部屋には，やや高い所に小さな窓が1つあるだけで，コンクリートの壁に囲まれ，部屋の中には，やや低くて固いベッドが1つあり，清潔なシーツがかかっていた。いわゆるロッカーは木製で，扉の具合は余りよくなかった。いうなれば，安宿のシングルベッドの部屋とでもいえる部屋で，風呂もシャワーもなかった。部屋の外で共用の風呂を浴びて部屋のベッドで横になったが，風が通らないので猛烈に暑かった。たまらないので，ウィスキーの力を借りて寝ようとジュースを頼んだら，ビールびんよりやや小さいびんに入った冷たいオレンジ・ジュース

を渡してくれた。文字通り100％の天然果汁で，よく冷えたジュースは，「ルルドの泉」の水もとても及ばないと思われるほど有難く，美味しかった。そのジュースにジョニウォーカーをたっぷり入れて，がぶ飲みし，睡眠薬の代用を期待した。

その部屋に入ったときに，留置場か囚人の監房を連想したが，ウィスキーで活発に血液が走りまわる頭では，その連想が間違いでないような気がして，すっかり楽しくなった。かって，明治時代に「政府尋問の廉あり」と兵を挙げたことのある土地で，戦時中の生意気な中学生の頃から，先輩達に「日本の将来を誤まらせる」という理由で，東条ら主要な政財界の要人を葬り，日本の針路を変えることを散々叩き込まれていた。その当時，私は自分の生涯を終える所が刑場か獄舎であると気楽に考えていた。そのような育ち方をしたせいか，中学生のときに憲兵隊に連行されたり，進学でやってきた東京では，時折，特高の家庭訪問？をうけていた。田舎の中学で，在学生が憲兵隊に連行されたのは，後にも先にもなかったらしい。

戦後は世の中が変り，何を口にしても大手を振って歩けるようになり，却って気抜けした思いで生き長らえている。このような私からみれば，戦後掌を返すように，いわゆる進歩的といわれる言辞をもてあそぶ人びとは，きわめて浅薄に見える。

それはともかく，いい世の中になった今日，図らずもイスラエルに来て，獄舎を連想する部屋で猛暑に悩まされるとは，思いもよらぬことであった。しかし，獄舎か刑場で生涯が終ることを覚悟していたのを思い出し，私はむしろなつかしい気分になり，楽しくなったのである。そして，階段の上から奈落の底に転落するように眠りに入り，朝までぐっすり眠った。

明るい食堂で，数人の客と一緒に朝食をして，その後，なつかしい獄舎の部屋を後にし，指定された時間にカネヴ氏達が現われるのを待った。建物の外に出ると，街路樹の木の葉の間から明るい空がのぞいていた。日当に出ると陽差しがきびしいので暑いが，よく繁った街路樹の影に入ると，風が通るので涼しかった。

前夜と同じ顔触れで迎えにきたカネヴ氏は，私を海岸に近いホテルに案内した。このホテルは前夜よりかなりましだった。その当時，テル・アヴィヴには，海岸の近くの高い所にダン・ホテルなどの近代的で豪華な一流ホテルがあったが，しかし，私が利用したのは，そのように豪華なホテルではなかった。

その後，朝出かけて，あちこちをまわり，夕方帰って来る生活が，滞在している間そのホテルで続いた。

ホテル近くの海岸では，気の早い人びとが海水浴を楽しんだり，砂浜で遊んでいた。海岸に立てば，地中海が一望に眺められ，ほとんど毎日その海岸で，燃えるような太陽が水平線に沈むのを眺めていた。地中海の東端に当るその海岸に初めて立ったとき，「遂にオレはやって来たぞ」と思った。中学時代に，「いつかアジアの西端に立ち，地中海を眺めてやるぞ」と，私は級友達に語っていた。その言葉通りに，アジアの西の端に立ち，目の前に広がる地中海を眺めていたのである。

海岸には，いつも海から強い風が吹き，照りつける太陽の下でも，風は涼しく，心地よかった。夕陽が落ちても，あたりは暑いが，海岸では，夕涼みを楽しむことができた。通常では，一般的な古い建物は，イスラム風の厚い土壁に囲まれ，窓が少なく，あっても，窓が小さい。これは暑い外気を土壁で斜断し，また，余計な暑気が家の中に入らない工夫である。このような家に住んでいる近くの人びとも，夕方には海岸に出て，よくアイスクリームをなめていた。

私の利用したホテルでは，天井が高くて広い食堂は多少涼しかったが，冷房などの文明の利器を用いていないので，部屋の中は暑かった。そこで，夕食後には，屋外のテラスで椅子に腰を下ろし，夜空の星をながめながら，夕涼みを楽しんでいた。そのホテルには，聖地巡礼の観光で訪づれた長期滞在者が泊っていた。夕涼みをしていると，よくかれらに声をかけられた。

ある日の夕方，初老の上品な婦人に声をかけられた。かの女はアメリカからの観光客であった。かの女に聞かれるままに，私が約1週間しか滞在しないこ

とを告げると，かの女はさも気の毒にという表情でいった。

「それはお気の毒な。私は1カ月いるが，それでも足りない位です。ジョルザレム（イェルサレム）にはもう行かれましたか。ナザレはどうですか……ナザレにはもう行かれたと。それは結構でした。あそこは重要な聖地ですからね」

おだやかな話し振りで，私がもうナザレを訪ねたのを喜んでくれた。

そのうちに，話題が変り，かの女は世界で初めてアメリカに社会保障法が登場した1930年代の色いろな話をしてくれた。

「それはもう大変な時代でした。私は大学生でしたが，卒業しても，世の中が真っ暗で，苦しい時代でした」

かの女はまるで私にその当時の話をするためにイスラエルを訪ねたかのように，大不況の苦しかった時代の話を，長い間熱心に話してくれ，話の内容は興味深く，また感銘深いものだった。自分の息子にでも話しているようなかの女に，私達を孫のようにしてきびしく躾けたり，色いろ教えてくれたイギリス貴族出身のG女史を，私は思い出した。もっとも，G女史はそれ以前に故人になっていた。

5. 市民の横顔

イスラエル人は砂漠を緑に変える，といわれる。テル・アヴィヴの中では，それ程この言葉に実感が湧かないが，郊外に出ると，この言葉がよく判る。そこには，小綺麗でこじんまりした勤労者の住宅などが並び，それらの住宅の庭には，芝が生え，花が咲きこぼれていた。しかし，芝生の切れた所から，砂漠が広がっていた。砂漠は芝生に変えられ，芝生に囲まれた家の戸口を出ると，芝生の先に砂漠が広がっていた。

砂漠を緑に変える努力のせいであろうが，テル・アヴィヴには，よく木が茂っている。道路の並木もよく茂り，歩道の木蔭に，喫茶店のテーブルや椅子が進出し，人びとはそこでよくコーヒーを飲んだり，アイスクリームを口に運びながら，楽しそうに時間をすごしていた。

空気が乾いているせいか，イスラエルの人びとは，よくコーヒーや紅茶を飲み，アイスクリームを楽しんでいる。カネヴ氏も時折喫茶店に私を連れて行き，いつもアイスクリームを注文していた。ある日，ある小さな喫茶店で，アイスクリームをつつきながら話をしているとき，カネヴ氏がロンドン大学で一時教鞭をとっていたことを話してくれた。すると，それを聞いていた隣りのテーブルの紳士が，私達の話に加わった。その人はロンドン大学の教授何がしと名乗った。その教授とカネヴ氏はロンドン大学の話題で，お互いに知っている土地，建物，人びとなどの名前が出て，話がよく合っていた。しかし，カネヴ氏がかれの知人である「ティトマス教授」（R. M. Titmuss）のことを話題にしたが，ロンドン大学の何がし教授はティトマスを知らなかった。日本には，ティトマスの信奉者が多いが，かれらは「そんな馬鹿なことがあるか」といい，「そいつはニセ者だ」というだろう。何をいっても勝手だが，知らなかったのは事実である。

イスラエルは国民皆兵で，18歳以上の男女はいずれも兵役に服する義務があるので，この点では，窮屈な国である。これらの若い兵士達が，時折，通りの木蔭を歩いていたが，中には，軍服姿で手を握り，楽しそうに語りながら通りすぎる若い男女のカップルを見かけた。

ところで，社会保険公社はイェルサレムにあり，テル・アヴィヴからイェルサレムまでは車を利用することになる。道路は立派で，暑いのを我慢すれば，この間は快適なドライブになる。しかし，その後，新しい高速道路が完成されたので，もっと快適なドライブを楽しめるようになったそうだ。イスラエルでは，既存の立派な道路を捨てて，新しい道路を建設する例を見かけたが，何か特殊な目的でもあるのか，面白いことをするものである。

それはともかく，イェルサレムに向う道路には，赤いペンキを塗った鉄板らしいものが，あちこちの道路傍に置いてあった。若い松の林の中で見かけたのは，褐色の土と緑の松林の中で見たせいか，印象に強く残った。同行した案内

役の説明では，1948 年に建国した当時の戦いで破壊された戦車や車輛などの残骸を，このようにペンキを塗り，記念に残してあるのだそうである。建国後20年経ても，そのような物を残しているのに一種の感銘を覚えた。今日の日本に，それに類する物が果してどれだけ残っているだろうか。

イェルサレムは褐色の石の街と表現できるだろう。ここはテル・アヴィヴより緑が少ない。社会保険公社は市内の中心から少し離れた木立ちのないやや小高い所にあった。同行の案内者は，「社会保険公社が余りにも遠い所にあるので，このビルに辿り着く前に年金受給の申請者は死んで仕舞う」と冗談をいっていた。この国の年金制度とビルの場所を知っている者は，この冗談のもつ色いろな意味を理解できるだろう。

ある日，イェルサレムからの帰路，タクシーの相乗りを利用した。タクシーの座席は運転席を含めて三列あり，私と案内役は最後尾の席に座って，色いろ話していた。天井のないオープン車で，かなりのスピードで走っているから，大声でないと，お互いの話がよく聞き取れなかった。2列目の席にいた老婆が後を振り向き，何か話しかけたが，よく聞きとれなかった。すると，老婆は体ごと後ろを向き，大声で同行者にわめいた。

「旦那は何処だね」

「日本人だよ」

「日本人なら英語が判るだろう」

「判るよ」

「日本人は英語以外に何語を話すのかね」

老婆と同行者の喧嘩のようなわめき合いを聞いて，私はびっくりした。何とその老婆は日本人の言葉は英語だと思っていたのである。平素，私は少々のことには驚ろかないが，日本人の国語を英語だと考えている御仁にお目にかかったのには驚ろいた。同行者が日本人は固有の日本語を持っており，英語は外国語の1つだと大声で，息をつきながら説明すると，今度は老婆がびっくりしていた。そして，私の方を振り向きながら，老婆は横にいた乗客にさも得意そうに，それを説明していたらしい。かの女は日本人が日本語というのを話すというのに大変な興味を抱いたらしい。それにしても，何処で，何を，どう間違ったのか，日本人の国語を英語だと思っている人がいるのを初めて知り，奇妙な思いをしながら，苦笑したものである。あるいは，老婆は日本をアメリカのある1つの州とでも考えていたのかも知れない。この老婆の質問に，かって，中国で中国人の兵士に，私が中国語で日本人であることを説明したとき，「お前の中国語で，日本人の筈がない」とどうしても信用してくれないので，大変困ったのを思い出した。イスラエルの老婆によれば，日本人は英語を国語にしていることになり，これも厄介かつ迷惑な話である。